

日記と物語の関係をめぐって

——『更級日記』を中心に——

伊藤 守 幸

一

寛弘五年（一〇〇八年）という年はおもしろい年である。もともとここで「おもしろい」というのはあくまでも我々の立場からする言い方であって、むしろそれは特別な年であったと言った方がよいかもしれない。それが特別な年であればこそ、紫式部は、わざわざその年の秋から冬にかけての出来事を中心に据えた日記を書き記すことにもなったのである。周知のように『紫式部日記』は、寛弘五年九月十一日の中宮彰子の出産前後の事情を記録にとどめることを主要な執筆動機のひとつとしている作品である。しかもその執筆動機は、式部にとって内発的なものというわけではなく、主家の命という外発的な動機に基づいた執筆であろうという推測もなされているように、敦成親王の誕生は、やがて政治的に榮華の絶頂をきわめることになる藤原道長にとって、その榮華の道筋に決定的な一步を画す重大事であり、ながく記録にとどめるに値する出来事だったのである。

さて、寛弘五年という年が道長一族にとって「特別な年」であった所以はどのように理解されとしても、我々は何も政治的な興味によってのみ、この年に注目しているわけではない。右に触れた中宮の出産をめぐる記事は、道

長の命による執筆であると否にかかわらず、多分に公的な性格を有する記事とみなし得るものであり、そうした記事を含んでいることが、当代女流日記文学の世界における『紫式部日記』の特異性を際立たせる要因ともなっていることは、ことさら論及するまでもない周知の事実である。しかもさらに特異で奇妙なことには、この日記はそうした公的な性格を有する記事と同時に、いわゆる消息文部分に代表されるような、きわめて私的な感懷を述べた記事をも併存させているのである。しかもそこに述懐される私的感懷は、大抵の場合、中宮の出産の事情を記した晴れがましい記事とまつたくの対照をなすかのように、深い憂愁と屈託にみちたものとなっているのである。本稿は『紫式部日記』を論じることを目的としているわけではないので、この作品の特異な構造的・二重性の問題についてこれ以上踏み込むことはしないが、ともあれこの日記が中宮出産の晴儀の記録としてのみ自己完結しなかったおかげで、我々は寛弘五年という年を、道長一族とはまた違った意味で特別な年として記憶にとどめることができたのである。すなわち、『紫式部日記』の存在によってこの年が記憶にとどめられるとすれば、政治的に敦成親王誕生の年として記憶されることが重要なのではなく、むしろ『源氏物語』成立の年としての文学史的記憶の方こそが問題なのである。もちろんそう言ったからといって、現存形態の『源氏物語』の最終的成立時点を、この日記によって確定できるといわけではないが、それがどのような形態としてであれ、寛弘五年という年にすでに『源氏物語』が相当にひろく流布し始めているという事実を、我々はこの日記から知ることができるのである。そうした意味で、我々にとっては、うぶやない座養の儀の様子を記した記事や喜色満面の道長の姿などよりも、たとえば次のような記事の方が、はるかに興味深いものとして読まれるのである。

局に、物語の本どもとりによりて隠しおきたるを、御前にあるほどに、やをらおはしまいて、あさらせたまひて、みな内侍の督の殿にたてまつりたまひてけり。よろしう書きかへたりしは、みなひき失ひて、心もとなき名をぞ

とりはべりけむかし。⁽¹⁾

里から取り寄せて局に隠しておいた「物語の本ども」を、自分の留守中に道長が勝手に探し出して「内侍の督の殿」(道長の次女妍子)に献上してしまったと記すこの文章は、『源氏物語』の流布の実態を生々しく伝える第一級の史料とみなし得るはずである(右の文中に『源氏物語』の呼称は登場しないが、『源氏物語』作者としての紫式部の評判は日記の他の箇所でもたびたび言及されており、従来の諸注も大方はこの「物語」を『源氏物語』と解している)。不本意な草稿本の流布を心配する記述からは、現存の『源氏物語』の形態に関する根本的な疑問さえ喚起されそうであるが、ともあれ、日記中のいくつかの記述を通じて、寛弘五年当時、『源氏物語』が、中宮をはじめとする女性達に言うに及ばず、一条天皇や道長、公任といった男性達の間でもひろく読まれていた事実が知られるのである。

ところで、作者自身による『源氏物語』への言及が認められるという点で、この上ない史料的价值を有する『紫式部日記』ではあるが、先にも述べたように、この日記によっても、現存形態の『源氏物語』の最終的成立時点を確認できるというわけではない。現存する五十四帖の『源氏物語』とほぼ等しいであろう物語の存在を我々が確認できるのは、時代はやや下るが、『更級日記』の記述を通してである。しかも、記録として残されている限りでは歴史上最初の本格的『源氏物語』読者と言つてよい(一条天皇や道長らの発言は、記録されているといつてもきわめて断片的なものにすぎない)菅原孝標女の生まれたのもまた、寛弘五年なのである。

『紫式部日記』中の記事によって『源氏物語』の流布を具体的に確認できることから、物語成立の目処ともされている寛弘五年というその年に、やがて自伝的日記の中で、自己の人生と『源氏物語』とのかかわりについて詳しく書き記すことになるひとりの女性が生まれ合せているというのも、まことに不思議な偶然と言うほかない出来事ではある。

……をばなる人の田舎よりのぼりたる所にわたいたれば、「いとうつくしう生ひなりにけり」など、あはれがりめづらしがりて、帰るに、「何をか奉らむ。まめまめしき物は、まさかなりなむ。ゆかしくしたまふなる物を奉らむ」とて、源氏の五十余巻、櫃に入りながら、在中将、とほぎみ、せりかは、しらら、あさうづなどいふ物語ども、一ふくろとり入れて、得て帰るここのうれしさぞいみじきや。

よく知られた『更級日記』の一節であるが、ここに言われる「源氏の五十余巻」が、そのまま現在の『源氏物語』五十四帖に完全に対応するかどうかはにわかに断じがたい。しかし、ともかくも寛弘五年から足かけ十四年後の治安元年当時、菅原孝標女が入手することのできた『源氏物語』は、「五十余巻」というその巻数からしても、現在我々の目にする物語とほぼ同じ内容を有するものであったろうとは推断されるのである。そして、この物語との出会いが、たまたま一条朝期に生まれ合わせた一女性の生涯にとつて、どれほど重大な意味を持つものであったのかということも、『更級日記』という作品を通じて、我々はつぶさに知ることができるのである。

五十余年の人生の回想として書きなされた『更級日記』は、決して単純な構造を有する作品ではないが、『源氏物語』の存在が自己の人生にどのような影響を及ぼしたかという問題が、この自伝作品の重要なテーマのひとつとなっていることは、一読しただけでも簡単に見て取れる事実である。物語に眩惑され続けた少女が、長じて後いかなる現実に直面し幻滅の悲哀を味わうことになったのかという、物語と現実、幻想と幻滅の関係をめぐる事の次第としてこの作品を読めば、西欧の近代小説の発見したテーマ（というより、小説というジャンルの成立そのものが、そうしたテーマの発見と切り離せないのだが）をはるかに先取りしているようでもあるが、その種の問題意識そのものは、実はす

でに『蜻蛉日記』によって提示されていたものでもあった。『蜻蛉日記』の序文は、あたかも反物語の宣言文とでもいったような体裁を呈している。

かくありし時過ぎて、世の中にいとものはかなく、とにもかくにもつかで、世に経る人ありけり。かたちとて
 も人にも似ず、心魂もあるにもあらで、かうものの要にもあらであるも、ことわりと思ひつつ、ただ臥し起き明
 かし暮らすまに、世の中におほかる古物語の端などを見れば、世におほかるそらごとだにあり。人にもあらぬ
 身の上まで書き日記して、めづらしきさまにもありなむ。天下の人の、品高きやと、問はむためしにもせよかし、
 とおぼゆるも、過ぎにし年月ごろのことも、おぼつかかりければ、さてもありぬべきことなむおほかりける。⁽³⁾

ここに展開されている物語批判は、「古物語の端などを見れば、世におほかるそらごとだにあり」という言い方に端的に示されるように、主として物語の内容にかかわる批判である。しかし、そうした批判を述べている文章であるにもかかわらず、「……とにもかくにもつかで、世に経る人ありけり」という書き出し方は、三人称仮託の表現形式を用いている点において、すでに物語的語り口への接近を示すものとなっており、ここでの物語批判が、物語の方法にまで及ぶものでないことは明らかである。さらに『蜻蛉日記』を総体として見たときには、特に下巻において、作品が物語的世界への微妙な傾きを示し始めるといった問題も存在するのであるが、ともあれ右の序文に示された素朴な物語批判は、基本的には日記本文の執筆を通じて、実践的に具体化されているとみなすことができそうである。なぜなら、右の序文に続いて展開される日記の叙述において、あくまでも「身の上」の事にこだわりの続け、「そらごと」を排除しようとする姿勢は、一貫して貫かれているからである。

さて、そのような『蜻蛉日記』に対し、同じように物語への屈折したこだわりを示している『更級日記』の場合、作者と物語との関係はさらに複雑なもののようなのであるし、物語に対するこだわりの深さも一層深刻である。

物語に対する屈折した思いは、『更級日記』においても、たとえば「昔より、よしなき物語歌のことをのみ心にしめで、夜昼思ひておこなひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし」という晩年の述懐などにおいて、端的な形で表明されている。そして、そのように執筆時点の立場からする述懐においては物語に対する批判的言辞をたびたび書きつけておきながら、この日記もまた『蜻蛉日記』と同様に、物語的な三人称表現によって書き起こされているのである。

あづま路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめることにか、世の中に物語といふもののあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなる昼間宵居などに、姉継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしきまされど、わが思ふままにそらにいかでかおぼえ語らむ……

等しく物語に対する批判的まなざしを有するといつても、『蜻蛉日記』と『更級日記』の間には大きな懸隔も存在する。そして、道綱母、孝標女、それぞれの物語に対する関係を隔てているものが『源氏物語』の存在であることは、両作品の内実に照らして明らかである。すなわち、『源氏物語』以前の時代を生きる道綱母にとって、少女時代に触れた多くの物語は、兼家との結婚によつて経験することになったおとなの女としての実質的な生活のありやうと対比したとき、『古物語』の「そらごと」として一面的に否定されるものでしかなかったのである。そして、そのような「そらごと」の世界に対して、彼女は自身の「身の上」を書き記すことにより、「天下の人の、品高きやと、問はむためしにも」しようという言挙げをするのである。もっとも、『蜻蛉日記』の序文の眼目は、自分がこれから何を書くかとしているのかを明らかにすることにあり、『古物語』の「そらごと」は、その点を鮮明にするために引き合いに出されたという面もあるので、この一文をもって、たとえば彼女が『竹取物語』や『伊勢物語』の「そらごと」をまったく無

価値なものと断じていたとまで決めつけることは、もちろんできない。しかし、先にも触れたように、『蜻蛉日記』においては、序文の宣言を忠実に実行に移すかのように、専ら語り手自身の「身の上」を記すことにのみ関心が向けられ、物語とのかかわりのことなど、その後は格別かえりみられることもないのである。そうした作品のありようを見るとき、少なくとも『蜻蛉日記』の表現上にあらわれた限りの問題としては、「身の上」について「書き日記」するという行為の意味を強調するための否定的媒介としての意味以上のものを、物語に認めることはできないのである。

さて、そのような『蜻蛉日記』に対して、十四歳にしてすでに『源氏物語』を「それにおぼえ浮ぶ」ほど愛読していた孝標女にとつて、物語とは、簡単に「世におほかるそらごとだにあり」と言つて済ましてしまえるような代物ではなかった。彼女がその日記を書き起こすに当たつて、遠く都を離れた土地にあつて物語への憧れを募らせる少女の姿を描くことから始めているのは、象徴的である。都とは、物語の流布の中心地であり、また多くの物語の舞台ともなっている場所であるが、その都から疎外された「あづま路の道の果てよりも、なほ奥つ方」にあつては、物語とは、人々の噂話の中にしか存在し得ないものであつた。そして、そうした物語（及び都）からの疎外状況は、少女の物語憧れをひとしお募らせて行くことになる。しかも、すでに見た通り、彼女が耳にする噂話の中には、早くも光源氏の名前さえ登場していたのであつた。

菅原孝標が上総介として任地へ下つたのは、寛仁元年（一〇一七年）のことである。このとき十歳の孝標女は、継母（上総大輔こと高階成行女）や兄、姉らとともに父に同行し、以後四年の歳月をこの地で送ることになる。このことは、逆から言えば、長和五年（九歳）以前の孝標女は、京都で生まれ育つてということでもある。そして、その間の九年という時間が完全に空白であるはずもないから、あるいは彼女は上総下向以前に、京都においてすでにいくつかの物語を目にする機会を持っていたかもしれないし、『源氏物語』にしても、その名前くらいは耳にしているも

おかしくはないはずである。⁽⁴⁾しかし、彼女は、自らをあたかも僻遠の地で生まれ育った田舎娘であるかのようにおぼめかしながら、日記を書き起こすのである。

こうした『更級日記』劈頭の筆致は、時に日記作品の虚構性をめぐる議論を喚起したりもするのであるが、この場合、「虚構」という言葉を用いるとしても、それがまったくの「そらごと」という意味合で用いられるはずもないことは明らかである。なぜなら、たとえ九歳以前の人生が切り捨てられているにしても、『更級日記』の冒頭に語られている事情は、孝標女にとって、深い内的な真実を表出していると考えられるからである。およそ人が物語と出会うのにふさわしい時期があるとして、十歳から十三歳という年齢は、生涯のうちでも最も特権的な時間と言つてよいものはなからうか。そんな時期に物語から隔てられていたことが、彼女の物語憧憬を決定づけたとしても何の不思議もあるまい。したがって、彼女が自分の人生と物語とのかかわりについて振り返ろうとするのであれば、上総での四年間の意味が、まず真先に反省されるのは当然である。逆に言えば、『更級日記』の冒頭がこのようなものとして書き起こされたとき、この作品の重要なモチーフもまたすでに提示されているとみられるのであって、そうした意味において、この冒頭部分は明確に創作的な意図によつて支えられていると言うことも可能なのである。起筆部分で都への旅立ちを描くという形で、作品の始発と作者の人生の始発とが巧みに重ね合わせられ、さらにそこに物語を求めている旅立ちという象徴の意味合までが重ねられるという書き出し方は、『更級日記』全般の内実には照らして、これ以上は望みようもないくらいみごとに導入部となっているのである。

さて、『更級日記』の起筆部は、そのように巧妙に書きなされているわけであるが、この部分に関しては、さらに考えてみなければならない問題も隠されているのである。ことは「あづま路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人」という自己規定にかかわる問題であるが、「あづま路の道の果てなる常陸帯のかごとばかりもあひ見てしがな」

（『古今和歌六帖』、紀友則）という歌を引歌とするこの表現に関しては、上総を常陸（Ⅱ）「あづま路の道の果て」よりも「なほ奥つ方」とすることに地理的にやや無理があるため、以前から議論があった。そして、この表現の持つ意味を、作者と浮舟との関係に着目することによって読み解いたのが、犬養廉氏である。

東路の道の果て、すなわち常陸は浮舟登場の地である。源氏物語をそらんずる彼女であつてみれば、思いわふ浮舟の「……ひたひきならすをとも、おかしく見し東路のことなども思ひいでられて……」（手習）などの詞句も常に心に去来したのであろう。常陸から上京した浮舟は、悲運ななりに、たまゆらの恋に身を焼いた。孝標女は同じ常陸介の娘として、燃えることもなくさだ過ぎ、ゆくりない結婚に身を委ねる。やがて坦々たる生活の倦怠の果てに、その夫をさえ失い、「あづまぢの道の果てよりもなほ奥つ方におひいでたる人」は、「かうのみ心にもものかなふかたなうてやみぬる人」として、功德もつくらず漂っている。孝標女にとつて、身の幸は浮舟に較ぶべくもなかった。だからこそ、この自叙の冒頭に「常陸帯」の一首を引きながら、「あづまぢの道の果て」（常陸）よりも「なほ奥つ方」と、浮舟より更に草深い地から、おぼろに自己を登場させ、しかも「いかばかりかはあやしかりけむを」と自卑の言葉を以て弁じたものであろう。

冒頭の自己規定をめぐる解釈として、今はこれに付け加えるべきこともないが、問題は、この自己規定が、当然のことながら執筆時の作者によってなされているということである。すなわち、この作者は、先にも見たように、一方では「よしなき物語歌のことをのみ心にしめて、夜昼思ひておこなひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし」と、物語に対する否定の言を書き連ねておきながら、同時に（起筆部に描かれるのは少女の姿であつても、その表現に腐心しているのは執筆時の作者であるから）冒頭の一句において早くも浮舟への連想を誘うような文飾を施しているのである。ただし、それを文飾と言うとしても、この自己規定の内包する問題が、単なる文飾の問題とし

て片づけてしまえるようなものではないということは、大養氏の議論からも明らかである。物語を求めて旅立つ少女の姿を描くただけなら、他にいくらかでも書きようはあったのであり、そこに、上総との位置関係においていささか無理をしてまでも、敢えて「あづま路の道の果て」（常陸）が持ち出されなければならなかったあたり、やはり浮舟の影が落ちていると見るしかあるまい。少女時代以来久しく憧れの対象であった浮舟に対するこだわりは、晩年の執筆時においても、なお深く作者の心を領しているのである。⁽⁶⁾

さて、物語を求めての旅立ちという書き出しが、いかにも作品の導入部にふさわしい、初々しく期待にみちた印象を与えるにしても、作品の大枠に即してみれば、そんな少女の物語憧憬も、結局のところ「よしなき物語歌のことをのみにしめて……」という、老年の苦い認識に辿り着くだけのことである。しかしながら、「よしなき物語」という認識が作者にとつてどれほど苦いものであったにしろ、我々にとつて一層複雑な味わいとして感じられるのは、あたかも思いがけず洩らされた本音のように書きつけられた、「あづま路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人」という自己規定の一句なのである。

右に述べたように『更級日記』の大枠を憧憬から幻滅への道筋として捉えた場合、物語を求めての旅立ちという作品冒頭部の構図は、そうした作品全体の大きな構図と照応するように書きなされたものと捉えることができる。そして、そんな冒頭部分にあつて、「あづま路の道の果てよりも」という自己規定が興味深いのは、そうした自己規定の仕方によって露呈されるのが、十三歳の少女の内面ではなく、執筆時の作者の心理だからである。すなわち、物語を「よしなき」と捉えているはずの執筆時の作者は、この期に及んでなお、浮舟を引き合いにしながら、あるいは浮舟になぞらえるようにしながら、自身の身の上を振り返ろうとするのである。こうした心理というものは、「われはこのごろわろきぞかし、さかりにならば、かたちもかぎりなくよく、髪もいみじく長くなりなむ、光の源氏の夕顔、宇治

の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめ」などと考えたりしていた少女時代と、本質的に変わりがないのではあるまいか(もちろん少女時代はこうだったと記すのは、執筆時の作者なのではあるが)。そして、思わず我が身を浮舟になぞらえてしまうような姿勢にしろ、「よしなき物語」という苦い認識にしろ、それらがともに作者にとつて真実であるとするならば、そうした物語に対する二律背反的な態度のありようこそ、少女時代以来まったく変わることのないものであり、物語に対するこの作者の姿勢を、最も特徴的に示すものと言えるのではなからうか。

この日記の中でも最もよく知られた場面であるが、治安元年、十四歳の作者は、念願かなって手に入れることのできた『源氏物語』を耽読している最中に、次のような夢を見ている。

はしるはしる、わづかに見つ心も得ず心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず几帳の内にうち臥して、引き出でつつ見るこち、後の位も何にかはせむ。昼は日ぐらし、夜は目の覚めたるかぎり、灯を近くともして、これを見るよりほかのことなければ、おのづからなどは、そらにおぼえ浮ぶを、いみじきことに思ふに、夢に、いと清げなる僧の黄なる地の袈裟着たるが来て、「法華経五の巻をとく習へ」と言ふと見れど、人にも語らず、習はむとも思ひもかけず……

こうした夢の背景としては、狂言綺語の時代思潮の影響も指摘されているが、ともあれここには物語に耽溺する姿勢と、そのことに対する仏教的立場からの牽制とが併記されているのである。「よしなき物語」という思いを抱きながら、「あづま路の道の果てよりも……」と書き進める晩年の作者と、どこが違うだろうか。そして、少女時代と晩年と、それぞれの時点において示される精神的態様が、本質的に同質であるとすれば、かつての十四歳の少女は、『源氏物語』を「そらにおぼえ浮ぶ」ほどに耽読したとき(おそらくは『源氏物語』そのものを通じて)、いずれ生涯にわたってこたわり続けることになる重要な問題に、はやくも遭遇してしまつたことになるのである。そして、その

この意味について、晩年の作者は果たして十分に理解していたのかと問うとすれば、その答えもまた作品の中にしか見出せないのであるが、理解の程度は別として、そうした点について彼女が無自覚であったならば、おそらく『更級日記』は、現在見られるようなものとしては存在し得なかつたはずである。簡単に物語に背を向けてしまった伯母の日記とは逆に、『更級日記』が、私生活上の多くの重要な（と一般にはみなされるはずの）出来事については省筆しながら、物語とのかかわりについてこだわり続けているのは、『源氏物語』という、たかだか一物語にすぎない存在が、自己の人生に対してどのような意味を持ってしまったのかという点について、作者が十分に認識していたからに他ならない。そのように考えれば、『よしなき物語』といった物言ひの方が、むしろ仏教的立場からする遁辞のようにさえ聞きなされてしまうほどである。

ともあれ、物語との関係という観点から見渡したとき、『蜻蛉日記』と『更級日記』というふたつの作品の間に認められる顕著な差異は、文学史上における『源氏物語』の意味の大きさをも、改めて浮き彫りにしてくれるのである。

三

さて、前節では、『更級日記』と『源氏物語』の関係について論及したわけであるが、それでは、孝標女には、本稿冒頭で触れたような寛弘五年という年の意味は、どの程度認識されていたのであろうか。端的に言って、彼女が『紫式部日記』を読んでいたかどうかは気になるわけであるが、すでに諸家の指摘もあるように、日記中の、特に宮仕え場面の記事の中には、明らかに『紫式部日記』との関係が想定されるような記事が存在するのである。

たとえば、長暦三年（一〇三九年）十二月二十五日の宮の御仏名の夜、頼通邸からの帰り道、孝標女は「年は暮れ

夜は明け方の月影の袖にうつれるほどぞはかなき」という感懷を洩らしているが、これなど同じく歳晩の感懷を詠んだ歌として、寛弘五年十二月二十九日の「年暮れてわが世ふけゆく風の音に心のうちのすさまじきかな」という紫式部の歌を連想させるものがある。さらに、『更級日記』には、水鳥をめぐって交わされた次のような贈答も記されている。

御前に臥して聞けば、池の鳥どもの、夜もすがらこゑを羽ぶきさわぐ音のするに、目も覺めて、

わがごとぞ水のうきねに明かしつつ上毛の霜をはらひわぶなる

とひとりごちたるを、かたはらに臥したまへる人聞きつけて、

まして思へ水の仮寝のほどだにぞ上毛の霜をはらひわびける

この記事に関しては、秋山虔氏によって次のような注釈が加えられている。

水鳥に寄せて自らの孤独の心を凝視する紫式部の次のような歌が思い起こされる。「水鳥を水の上とやよそに見むわれも浮きたる世を過ぐしつつ」(『紫式部日記』)。寛弘五年十月、一条天皇の土御門殿(藤原道長邸)への行幸も間近い頃の、はなやかに浮きたつ邸内の雰囲気から疎外された紫式部の心懷である。また同日記には、里居の式部と大納言の君という同輩女房との間にとり交された次のような贈答も記されている。「うきねせし水の上のみ恋しくて鴨の上毛に冴えぞ劣らぬ」(紫式部)。「うち払ふ友なき頃の寢覚にはつがひし鴛鴦せしぞ夜はに恋しき」(大納言の君)。

これらの記事を読み比べてみると、孝標女が『紫式部日記』を目にしていたことは、ほぼ間違いないと思われる。とすれば、あれほど『源氏物語』に心を奪われ続けた孝標女にとって、紫式部が『源氏物語』の流布について言及しているその年に、たまたま自分が生まれ合わせているという偶然は、さぞかし「いみじきこと」だったに違いあるま

いと想像されるのである。しかし、もちろん『更級日記』は、そんなことには何も触れてはいない。おそらく『源氏物語』は、相当の長期間にわたって執筆されたと思われるから、千年後の文学史的観点とは違って、当時の人々には、寛弘五年という年を取り立てて『源氏物語』の成立と結びつけなければならぬ理由もなかったかもしれないし、第一、ただの偶然にすぎない事柄について得意気に吹聴したとしても愚かしいばかりであろう。『更級日記』がそのことに触れないのも当然である。ただし、あくまでも孝標女ひとりの心事としては、寛弘五年生まれという偶然を「いみじきこと」とする思いは間違いなく存在したはずであるから、『紫式部日記』の影響を色濃く漂わせた一連の記事群についても、そうした観点から眺め返せば、寛弘五年に生まれ合わせ、『源氏物語』に魅了された一女性から、紫式部に宛てて贈られたひそかな挨拶のようにも見えてくるのである。

さて、右の事例では、仮にそこで孝標女が何がしか紫式部を意識していたのだとしても、そのことは表現の上にあらわに示されているわけではないが、『更級日記』の中には、もう少し直接的な表現として、『源氏物語』の作者を意識していると思われる記述も存在するのである。

永承元年（一〇四六年）十月二十五日の、初瀬詣での際の記事である。

……宇治の渡りに行き着きぬ。（中略）無期にえ渡らで、つくづくと見るに、紫の物語に宇治の宮のむすめどものことあるを、いかなる所なればそこにしも住ませたるならむとゆかしく思ひし所ぞかし、げにをかしき所かなと思ひつつ、からうじて渡りて、殿の御領所の宇治殿を入りて見るにも、浮舟の女君のかかる所にやありけむなど、まづ思ひ出でらる。

ここで、この初瀬詣での日時を確定できるのは、それが大嘗会の御禊の当日のことだからであるが、この記事については、特に「いかなる所なればそこにしも住ませたるならむ」という一句をめぐって、「もはや物語読者の態度とい

ふより、作者乃至批評家の態度である」という解釈が、石川徹氏によって提示されている。⁽⁹⁾物語作者の構想にまで踏み込んだ批評的なまなざしが認められるというわけである。ただし、この解釈に対しては、秋山虔氏の次のような異見も存在する。

「住ませたるならむ」の主語を『源氏物語』の作者とする解がある。(中略)八の宮がその娘大君・中の君を宇治に住ませたのは選択の余地もない処置で孝標の女がそのこと自体に疑問を抱く筈がないというのが主な論拠だが、(中略)作者の関心は依然、かつての自分の未来像をそこに空想した浮舟の方に注がれており、ここは、どんな場所柄ゆえ薫は浮舟を宇治に住ませたのだらうという好奇心のあらわれと解するのが自然であらう。⁽¹⁰⁾

「宇治の宮のむすめども」に重点を置くか、「浮舟の女君」を重視するか、どちらの解釈が「自然」かは微妙である。しかし、いずれにせよ、宇治という物語の舞台を訪ねたとき、孝標女が『源氏物語』の構想にまで思いをめぐらしていることは間違いない。仮にこの場面、なぜ薫は浮舟を宇治に住ませたのかと問うているのだとしても、浮舟登場以前、すでに久しく宇治は物語の舞台となっているわけであるから、その問いは、自ずと作品の構想にもかかわることになるはずだからである。

さて、孝標女の宇治訪問は、そのように宇治という土地を媒介として『源氏物語』へと結ばれる旅だったわけであるが、孝標女と宇治の関係については、他にもいささか気になる問題があるので、最後にその点に触れておくことにしたい。

永承元年の初度の初瀬詣での数年後、孝標女は再び初瀬に詣でている。それがいつのことなのかは厳密には確認のしようもないし、初度の旅の記事に比べて叙述も簡略であり、宇治を訪ねたという記録もない。旅の道筋は同じようであるから、宇治にも立ち寄っていたと思われるが、そのことに関する言及がないのは、繰り返しを避けたというだ

けのことかもしれない。しかし、私には、この再度の初瀬詣での記事は、何か重要なことを隠しているように思われてならないのである。

再度の初瀬詣での時期について、厳密には確認できないと述べたが、おおよその時期の推定ならば可能である。すなわち、永承元年の初瀬詣での前年、寛徳二年の石山詣でに始まる一連の物詣での記事群は、永承二年以降の記事については年次の確定が不可能であるが、初度の初瀬詣での記事の後に置かれた「二三年、四五年へだてたることを、次第もなく書きつづければ、やがてつづきだちたる修行者めきたれど、さにはあらず、年月へだたれることなり」という一文が、その間の事情を、大筋において明らかにしてくれるからである。

永承二年（一〇四七年）以降の記事で日付のはっきりしているものと言えば、天喜三年（一〇五五年）十月十三日の夜の阿弥陀仏来迎の夢の記事であり、その間のほぼ九年間の記事が年次不明である。その年次不明部分には、まず一連の物詣での記事が置かれ、続いてこれも一連の友人との贈答歌が置かれているわけであるが、ここで留意しなければならないのは、それら二種類の記事群が、時間的に、言わば「横の並び」を形成していると考えられることである。物詣での記事群と交友関係を語る記事群とは、内容的まとまりによって並べられており、時間的先後関係に基づいて配列されているわけではないのである。もし、これら二つの記事群の関係が時間的先後を示しているのだとすれば、物詣での記事はすべて永承年間の前半に集中することになってしまい、「二三年、四五年へだてたること」という説明と矛盾することになるのである。

さて、「二三年、四五年へだてたることを……」という説明に続くのは、春（年次不明）の鞍馬詣で、そして十月頃の再度の鞍馬詣で、「二年ばかりありて」の再度の石山詣で、そして先に触れた再度の初瀬詣である。したがって、再度の初瀬詣では一連の物詣での記事群の最後のものということになる。再度の石山詣での記事中の「二年ばかりあ

りて」という一句を見れば、「二三年、四五年へだてたる」という数字は、それほどいい加減なものとも思われないから、試みにそれらの数字を加算してみると、再度の初瀬詣では、永承の末年、乃至天喜元年前後のことであろうと推定されるのである。そして、関白頼通が宇治の別荘を仏寺に改めて平等院と名づけたのは、永承七年三月のことであり、翌天喜元年三月四日には、平等院阿弥陀堂（鳳凰堂）の供養が行われている。孝標女の一行が二度目の初瀬詣でに出かけた（そして当然「宇治殿」に立ち寄った）のは、ちょうどそんな時期に当たっていたのである。

再度の初瀬詣での記事は、「また初瀬に詣づれば、はじめにこよなくもの頼もし、ところどころに設けなどして、行きもやらず」と、書き起こされている。最初の初瀬詣でに比べて「もの頼もし」とあるのは、単に二度目の旅だからというばかりではなく、後文の「このたびは、いと類ひろければ」という記述からも知られるように、おそらくは夫の橘俊通も含めた、かなり大人数の旅だったからと考えられる。そして、「ところどころに設けなどして、行きもやらず」とある、その「ところどころ」の中に平等院が含まれていたのではないか、またそのことが、今回の初瀬詣でを大がかりなものにした理由の一半ではないかというのが、私の推論である。

もちろん、日記の中にはそんなことは少しも匂わされてはいない。記事に見えるのは、柞ははその森の紅葉と初瀬川、そして奈良坂辺りで野宿したこと、それがすべてである。しかし、この作者の場合、たとえば旅なら旅について、その本当の理由を明らかにしないままに一編の紀行を仕立て上げるといったことを、たびたび行っているのである（たとえば少女時代の東山の記や晩年の和泉紀行）。こころも、そうした事例のひとつと見てよいのではなからうか。もとよりそんな風に考えるためには、平等院について省筆した理由が見出されなければならないが、その点については、一連の物語で記事を包み込む大きな文脈が、ひとつの解答を与えてくれそうである。すなわち、一連の記事群は、次のようなふたつの文章によって、大きく枠づけられているのである。

今は、昔のよしなし心もくやしかりけりとのみ思ひ知り果て、親の物へ率て参りなどせでやみにしも、もどかしく思ひ出でらるれば、今はひとへに豊かなる勢ひになりて、双葉の人をも思ふさまにかしづきおほしたて、わが身もみくらの山に積み余るばかりにて、後の世までのことをも思はむと思ひはげみて、十一月の二十余日、石山に参る。

なにごとにも心になはぬこともなきままに、かやうにたち離れたる物詣をしても、道のほどを、をかしても苦しとも見るに、おのづから心もなぐさめ、さりとて頼もしう、さしあたりて嘆かしなどおぼゆることもないままに、ただ幼き人々を、いつしか思ふさまにしたてて見むと思ふに、年月の過ぎゆくを、心もとなく、頼む人だに人のやうなるよろこびしてはとのみ思ひわたるここち、頼もしかし。

これらの文章を見れば、一連の物語で、専ら現世利益の思いに支えられていることは明らかである（正しくは、そのように書きなされているということだが）。それらの物語での向かうところが、石山、初瀬、鞍馬といった観音信仰の地であるのも、そのことと無関係ではないはずである。

「極楽いぶかしくば宇治の御堂をうやまへ」（『後拾遺往生伝』）と京童に噂された平等院が、こうした文脈の中に収まりにくいものであることについては、もはや多言を要すまい。すなわち、この作品では、後世への思いは、現世利益の思いの後に来るものとして書きなされているからである。現世利益の祈りは、具体的には息子の成長と夫の栄達への期待として示されているわけであるが、その夫の急逝を記した後、天喜三年の阿弥陀仏来迎の夢を記すあたりの筆致に、構成的意図は歴然としている。康平元年の俊通の死と、天喜三年の来迎夢と、敢えて時間的順序の入れ替え

が図られているからである。そうした構成的意図を背景とするとき、この世の浄土としての平等院については、仮に作者がそれを目にしていたのだとしても、物語で記事の文脈からは排除されざるを得なかったのも当然のことと理解されるのである。

さて、以上の議論は、再度の初瀬詣での際に孝標女が平等院を訪ねたことを前提とした仮説であるが、仮にこの初瀬詣での際、まだ平等院が完成していなかったとしても、実は同じような問題は残るのである。『更級日記』執筆時の作者の耳に、浄土を彷彿とさせる平等院阿弥陀堂の評判が届いていなかったとは考えられないから、彼女が実際に平等院を見ていたかどうかということは別に、永承年間に二度も宇治に立ち寄っておきながら、宇治の持つそうした意味合についてまったく緘黙しているという事実は、やはり問題にされなければならないはずだからである。¹¹⁾

ともあれ、こうした『更級日記』の記述から我々の見ることでできるものと言えば、現世の浄土としての平等院についてはいっさい触れず、『源氏物語』の舞台としての宇治について語る作者の姿である。作者の物語に対するこだわりが、日記執筆時においてなお深いものであることは、このような事例からも知られるのである。

注

- (1) 引用は、山本利達校注『紫式部日記』（新潮日本古典集成）に拠る。
- (2) 引用は、秋山虔校注『更級日記』（新潮日本古典集成）に拠る。
- (3) 引用は、犬養廉校注『蜻蛉日記』（新潮日本古典集成）に拠る。
- (4) 秋山虔『更級日記』についての断章―東海道上洛記をめぐって―（『論集日記文学』所収、平三）には、「源氏物語」『螢』巻で光源氏が明石の姫君の教育の資として物語を選び分ける条があるが、そのとき姫君は八歳であった。文章道の家の嫡流に生い立った彼女が、上総下国以前に都の文化に薫染された人間形成の基礎を培わなかったとは考えがたいのである」という指摘がある。
- (5) 犬養廉『更級日記の虚構性―実人生とその自画像―』（『国文学』昭四四・五）。

(6) こうした議論ともかわる発言として、菊田茂男「物語幻想の崩落―源氏物語との邂逅と離脱―」（『国文学』昭五六・一）に、次のような指摘がある。

……作者と物語との邂逅とそこからの離脱は、「ゆかしきもの」から「あらましごと」へ、そしてやがて物語によって培われた幻想世界の音高き崩落を示す「よしなしごと」への認知へと到達することになるが、それは段階的に徐々に進行する現象であつたはずである。

『更級日記』の冒頭の一節は、そうした現実の時間の推移を静かに消去して、『源氏物語』と孝標女との関渉の全容を暗示的に開示する凝縮的構造として、いきなりわれわれの眼前に現出する。

(7) 細野哲雄「更級日記小考―その文芸観の背景について―」（『国語と国文学』昭二八・二）参照。

(8) 『更級日記』（新潮日本古典集成）頭注。

(9) 石川徹「源氏物語の影響を受けた平安後期の文学」（『国語と国文学』昭三一・一〇）。

(10) (8) に同じ。

(11) 因みに永承七年は末法第一年であるが、『更級日記』は、この件についても何も触れていない。それはなぜかということも、考えてみる価値のある問題かもしれない。『紫式部日記』とはほぼ同じ長さで、五十余年の人生を描き切った『更級日記』は、巨大な沈黙の部分によって覆われた作品でもある。